月刊 アートコレクターズ
Art Collectors
The Pleasure To See.
The Pleasure To Buy.

やっぱり
日本画が好き
2024

やっぱり日本画が好き 2024

インタビュー
智内兄助

対談
長谷川喜久
×
行近壯之助

寄稿
天野一夫

1
January
2024 NO.178

巨匠は語る

智内兄助（ちないきょうすけ）

「過剰」な装飾に宿る日本美術のエネルギー

ドラマチックな構図と高い装飾性で、あの世とこの世を行き来するかのような独自の美的世界を構築し、日本のみならずフランスなど世界各地で高い評価を得る智内兄助。画材にとらわれない日本画の姿を考察する際、日本美術から大きな影響を受けた智内の作品は重要な意味を持つ。今回は、智内にモチーフへのこだわりや作家人生の転機のほか、日本美術に対する思いを伺った。

モチーフへのこだわり

――近年は鶴をよく描かれていますよね。

2019年に、海外のコレクターから依頼があり描くようになりました。鶴は昔話にもよく出てくるように擬人化しやすいので、描いているうちに感情移入して、最終的には家内の姿を重ねるようになりました。以来、お気に入りのモチーフの一つです。

――昔はご息女でもある久美子さんを継続的に描かれてきました。

駆け出しの頃はモチーフをコロコロ変える癖があったのですが、一つのテーマとして追いかけられるモチーフを探した結果、行き着いたのが娘でした。

娘を描くといっても脳裏には別の女性を思い浮かべていたりもします。子どもの頃、幼稚園の登下校の際に利用していたバス停の前にベンチがあり、そこにいつも座っている女の人が凄く気になっていました。その女性は年齢の割に子供っぽい顔立ちで、一日中ずっとニコニコしていて、その不気味さや危ういバランスが岸田劉生の麗子にそっくりだったのです。後から聞くとその方は精神的にダメージを受けていたそうですが、年中同じ着物で赤い地の着物が汚れて黒光りしていたのが印象的でした。そういう姿から徳岡神泉の「狂女」も想起されました。今思えば相当感情移入をしていたのだと思います。娘「久美子」を通して、あの世とこの世を行き来しているかのような彼女の不思議な感じを表現していました。

ほかによく描くモチーフでいうと、桜だったら枝垂れ桜が好きです。垂れているものは美しい。天に向かって健康的に伸びていくのではなく、地に向かって落ちていくというのは、ともすれば不吉だと捉えられますが、そこにこそ宗教の目指す美の世界があるように感じます。畏（おそ）れにこそ圧倒的な美の力が宿っているのではないでしょうか。そういった恐ろしいものを過度に装飾的に突き詰めていくことで、恐怖と甘美が同居したキラキラした世界を浮かび上がらせたい。岩佐又兵衛の祭礼図はその最たるものですし、日本美術のコアにはその血が流れています。高校時代、美術教師にお前には岩佐又兵衛の血が流れていると言われましたが、今思えば「過剰さ」に美を見出して、執拗に描き続けるところが、その血の正体だったのではないでしょうか。

――智内さんの描く苔も、これでもかというほど鮮やかに青々と生い茂っていますが、それも過剰さの一つなのですね。

そうですね。長大な時間を潜り抜

『たず垂水』120×120cm

「いろは」60×73cm

け、今にポッと現れた苔の美しさを表現しようと思うとあのように濃くないと。苔もそうですが、古さを感じさせるものが好きです。だから食器一つにしても骨董市などで古いものを見繕ってきます。

あとは鳥なら鶴、花なら牡丹のように量感のあるものも好きです。例えば紅葉にしても集まって咲き誇っている様子を描きますし、細い枝にチラチラと付いているのはあまり好みではありません。山が真っ赤に燃えているように咲き乱れる紅葉の過剰さには生命の煌めきを感じます。しかし、それを描き切るには体力がいりますから、自分自身の肉体にも生命力が漲っていないといけませんね。

運命を変えた学園紛争

——そもそも智内さんは東京藝術大学では油絵を学ばれ、日本美術というよりも西洋美術に影響を受けていましたよね。

幼少期から西洋画が好きで、藝大に進学を決めた時も油画以外の選択肢は考えていませんでした。しかし、学園紛争で授業が軒並み中止になる中、当時唯一授業が行われていた日本画科に顔を出し、友人の有元容子らの制作を見ていくうちに、日本画に興味が湧いてきたのです。箔貼りや胡粉の溶き方一つとっても、日本料理で出汁をとるように丁寧に手間をかけてやっている。その所作がなんともいえず美しくて。ああいう職人仕事の方が性に合っているんじゃないかという気がしていました。そして雲肌麻紙の光を吸い込んだかのような美しさも魅力的に映りました。

けれども当時流行っていた落雁みたいにゴテゴテに岩絵具を塗り込むのは嫌でしたし、一から岩絵具を学ぶというのもハードルが高かったので、雲肌麻紙にアクリルで描くようになりました。アクリルは合理的で扱いやすく堅牢なので、すんなりと自分のものにできました。

学園紛争をきっかけに変化したのは技法だけではありません。真剣に自分が描くべきテーマを考え、デッサンに打ち込んだこともその後の糧になっています。その時にやはり自分は土着の宗教が根付いていた瀬戸内での幼少期の体験を描くべきだと考えるようになったのです。

当時は、昨日まで威張っていた先生が次の日には罵倒されるわけですから、相当なエネルギーが充満していました。多くの教授が生徒から逃げ惑う中、野見山暁治先生と民族音楽の小泉文夫先生だけは、生徒に真正面から自分の言葉で打ち返していて、この人たちは本物だと学生ながら感銘を受けたものです。

——描くべきモチーフとして思い定めた幼少期の記憶とはどのようなものなのでしょうか。

今はもうなくなってしまったようですが、島々に囲まれた故郷は当時独自の風習が色濃く根付いていました。四国はお遍路が盛んなので、昔はお遍路さんがチリンチリンと音を鳴らしながら玄関先に米を貰いに来るんです。それを渡すのは子どもの役割でしたが、逆光でよく見えない異様な風体のお遍路さんが当時は怖かった。そういうハレの場におっかなびっくりしながら参加する感覚は不思議なものです。

特に印象的だったのは父親の葬式です。色とりどりに装飾された座棺を担いで歌いながら畦道を通る列や周囲で回る風車など、目についた光景全てが心に刻み込まれました。その時は父親の死をまだ飲み込めていなかったのですが、人の死とはこんなにも美しいものなのかと感動しました。今でも絵を描くことで子どもの頃の鮮烈な記憶を追体験しているように思います。

——大学院時代にヨーロッパ各地の美術を見て回った経験もその後の制作の転機になったそうですね。

そのヨーロッパ研修で油絵は自分にとってネイティブな表現でないことを痛感しました。それこそヨーロッパは至る所に宗教美術が息づいていますし、美術史に名を残す巨匠から無名の画家まで並々ならぬ油絵の蓄積があります。キリスト教の寓意表現などはわからなくても、絵自体の凄みはありありと伝わってきます。

そういった歴史を目の当たりにして、今更日本人がこのフィールドで闘う必要があるのかと思い知らされましたね。そして、自分にとってのネイティブとは何かを考えたときに、藤原仏画に代表される日本美術に行き着きました。その時代の職人たちの技術は相当なものです。例えば線の美しさ一つをとってみても、血の滲むような鍛錬の積み重ねに裏付けられた自信が画面上にはっきりと現れています。そういった技術と豊かさが日本美術にはあったのですが、江戸時代になると幕府が美術を統括するようになり、狩野派をはじめとする粉本主義が蔓延すると、技術しか残らずどんどん痩せていきます。それは今の日本画にも通じるのではないでしょうか。苗字ばかり後生大事にして、マンネリズムから逃れられなくなっているような気がします。大学での徒弟制度が根強く残っている弊害もあるのでしょうが、先生の真似をしなくても自分の中から湧いてくるものを描くと、絵も自然と豊かになっていくはずです。

「瀬戸花」55×46cm

「飛騨 神明櫻」92×73cm

子どもの可能性

——智内さんは近年、アトリエのある蕨市の小学生を対象にしたワークショップも盛んに行われています。

市内の小学校で高さ1・8m、幅10mの巨大絵画を学年ごとに描くグループワークを実施しています。やはり共同作業は面白いですね。普段の図画工作の授業ではパッとしなかった子たちが輝いたりするんですから。そういう子の秘めたるエネルギーをなんとか引き出したいので、積極的に褒めるようにしています。

この前もある小学校でのグループワークの際、校庭に生えている欅をテーマに描くことになったのですが、普段はとくに目立たなかった子が、童話「ジャックと豆の木」のようにいきなり木にオレンジ色の梯子を描き始めました。それがなんとも鮮やかで、褒め続けていたら、嬉しくなったのか時間になっても夢中で描き続けてね、面白かったですよ。

実は、私も子どもの頃、図画工作の時間であまり褒められたことがなかったんです。当時から形に対して敏感だったのか大人びた具象的な絵を描き、みんなが描くチューリップや山を見ても、こんな風には見えないじゃないかという違和感がありました。それを正直に描いても他とは違うから、評価はされなかった。そういう経験があったから子どもの持つ可能性を侮ってはいけないと思うようになったのかもしれません。

子どもというのは本当に凄いもので、得体の知れないエネルギーに満ちています。一心不乱に線を描き続けて気付いたら本当に岩佐又兵衛のようになっている。私にもそのようなエネルギーが宿っていると信じていますし、そうあってほしい。そういうエネルギーが私の愛する日本美術の豊かさに繋がっているんじゃないかという気がしてなりません。

子どもたちとのグループワークは絵を介した一期一会の真剣勝負です。ああいう爆発するようなエネルギーとぶつかるのは本当に大事なことだと思います。

ちない・きょうすけ
1948年愛媛県生まれ。東京藝術大学大学院修了。1980年代初めから、和紙にアクリルで描く画法を確立し、日本画と洋画との境界を越えた革新的な表現方法に到達。日本の伝統美である衣装文様や花鳥風月を用いた「もののあはれ」を基調としたその作風は、独特の技法とあいまって智内独自の幻想世界を創り上げている。